

### 3.4 凸集合とその性質

直線 (line):  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in \mathbb{R}^n$  の 2 点を通る直線は,

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2, \lambda \in \mathbb{R}\},$$

あるいは

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = \lambda_1\mathbf{x}^1 + \lambda_2\mathbf{x}^2, \lambda_1, \lambda_2 \in \mathbb{R}, \lambda_1 + \lambda_2 = 1\}$$

で定義されます.

線分 (line segments):  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in \mathbb{R}^n$  の 2 点を結ぶ線分には, 以下の 4 種類があります:

- (a) 閉線分  $[\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2] = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2, 0 \leq \lambda \leq 1\}$
- (b) 開線分  $(\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2, 0 < \lambda < 1\}$
- (c) 閉開線分  $[\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2, 0 \leq \lambda < 1\}$
- (d) 開閉線分  $(\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2] = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2, 0 < \lambda \leq 1\}$

凸集合 (convex set): 集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  は,  $S$  の任意の 2 点を結ぶ閉線分が  $S$  に含まれるとき, 凸集合とよびます:

$$\left\langle \begin{array}{l} \mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S \\ \lambda \in \mathbb{R}^n, 0 \leq \lambda \leq 1 \end{array} \right\rangle \implies (1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 \in S.$$

半空間 (halfspace): ゼロベクトルではない  $\mathbf{c} \in \mathbb{R}^n$  とスカラー  $\alpha \in \mathbb{R}$  に対して

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{c}^T \mathbf{x} < \alpha\}$$

を  $\mathbb{R}^n$  の開半空間,

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{c}^T \mathbf{x} \leq \alpha\}$$

を  $\mathbb{R}^n$  の閉半空間とよびます. どちらの半空間も凸集合です.

**平面 (plane):** ゼロベクトルではない  $\mathbf{c} \in \mathbb{R}^n$  とスカラー  $\alpha \in \mathbb{R}$  に対して

$$\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{c}^T \mathbf{x} = \alpha\}$$

を  $\mathbb{R}^n$  の平面とよびます。  $\mathbb{R}^n$  の平面はすべて凸集合です。

**部分空間 (subspace):** 集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  が

$$\left\langle \begin{array}{l} \mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S \\ \lambda_1, \lambda_2 \in \mathbb{R} \end{array} \right\rangle \implies \lambda_1 \mathbf{x}^1 + \lambda_2 \mathbf{x}^2 \in S.$$

を満たすとき、  $S$  を部分空間とよびます。  $\mathbb{R}^n$  の部分空間はすべて原点を含み、また凸集合でもあります。

**頂点 (vertex):**  $S$  を  $\mathbb{R}^n$  の凸集合としましょう。点  $\mathbf{x} \in S$  は、  $\mathbf{x} \in [\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2]$  を満足する  $\mathbf{x}$  と異なる 2 点  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S$  が存在しないとき、  $S$  の端点といいます。

**定理 3.9.** (有限個でも無限個でも) 凸集合  $S_i$  ( $i \in I$ ) の積集合  $\bigcap_{i \in I} S_i$  は凸集合である。

**証明:** 任意に  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in \bigcap_{i \in I} S_i$  を選び、  $0 \leq \lambda \leq 1$  とします。すると、各  $i \in I$  に対して  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S_i$  であり、  $S_i$  は凸集合であるので  $(1-\lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 \in S_i$  が成り立ちます。したがって、  $(1-\lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 \in \bigcap_{i \in I} S_i$  も成り立ち、  $\bigcap_{i \in I} S_i$  は凸集合であることがわかります。

**凸多面体 (polyhedron / polytope):**  $\mathbb{R}^n$  の有限個の半空間の積集合として表すことのできる  $\mathbb{R}^n$  の部分集合を凸多面体 (polyhedron) とよびます。凸多面体が有界な場合、これを有界な凸多面体 (polytope) とよびます。

**凸結合 (convex combination):** 点  $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$  は、  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in \mathbb{R}^m$  と  $m$  個の実数  $\lambda_1, \dots, \lambda_m$  によって

$$\mathbf{b} = \lambda_1 \mathbf{a}^1 + \dots + \lambda_m \mathbf{a}^m, \quad \lambda_1, \dots, \lambda_m \geq 0, \quad \lambda_1 + \dots + \lambda_m = 1,$$

のように表すことができるとき、  $\mathbf{a}^1, \dots, \mathbf{a}^m \in \mathbb{R}^m$  の凸結合といいます。

**単体 (simplex):**  $\mathbf{x}^0, \mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m$  ( $m \leq n$ ) を  $\mathbb{R}^n$  の異なる  $m+1$  個の点としましょう.  $m$  個のベクトル  $\mathbf{x}^1 - \mathbf{x}^0, \dots, \mathbf{x}^m - \mathbf{x}^0$  が線形独立のとき,  $\mathbf{x}^0, \mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m$  のすべての凸結合の集合:

$$\left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} = \sum_{i=0}^m \lambda_i \mathbf{x}^i, \lambda_i \geq 0, i = 1, \dots, m, \sum_{i=0}^m \lambda_i = 1 \right\}$$

を  $\mathbb{R}^n$  における頂点  $\mathbf{x}^0, \mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m$  の  $m$  単体とよびます. 例えば, 0 単体は点であり, 1 単体は閉線分, 2 単体は三角形となります.

**定理 3.10.** 集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  が凸である必要十分条件は, 任意の整数  $m \geq 1$  に対して以下が満たされることである:

$$\left( \begin{array}{l} \mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m \in S \\ \lambda_1, \dots, \lambda_m \geq 0 \\ \lambda_1 + \dots + \lambda_m = 1 \end{array} \right) \implies \lambda_1 \mathbf{x}^1 + \dots + \lambda_m \mathbf{x}^m \in S. \quad (3.1)$$

**証明:** 十分性については, (3.1) で  $m = 2$  の場合を考えれば, 定義どおりに  $S$  は凸集合であることがわかります.

必要性は帰納法を用いて証明します.  $m = 1$  のときは自明,  $m = 2$  のときは凸集合の定義によって成り立ちます. では (3.1) が  $m = k$  に対して成り立つことを仮定し, それが  $m = k+1$  のときにも成り立つことを示しましょう. 以下のような  $k+1$  個の点と実数を選びます:

$$\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2, \dots, \mathbf{x}^{k+1} \in S, \quad \lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_{k+1} \geq 0, \quad \lambda_1 + \lambda_2 + \dots + \lambda_{k+1} = 1$$

$\lambda_{k+1} = 0$  のときと  $\lambda_{k+1} = 1$  のときは, それぞれ  $m = k$ ,  $m = 1$  の場合に帰着します. そこで  $0 < \lambda_{k+1} < 1$  とすると,  $\sum_{i=1}^k \lambda_i > 0$  となるので

$$\sum_{i=1}^{k+1} \lambda_i \mathbf{x}^i = \left( \sum_{i=1}^k \lambda_i \right) \left( \frac{\lambda_1}{\sum_{i=1}^k \lambda_i} \mathbf{x}^1 + \dots + \frac{\lambda_k}{\sum_{i=1}^k \lambda_i} \mathbf{x}^k \right) + \lambda_{k+1} \mathbf{x}^{k+1}.$$

さらに

$$\mathbf{x}^0 = \frac{\lambda_1}{\sum_{i=1}^k \lambda_i} \mathbf{x}^1 + \dots + \frac{\lambda_k}{\sum_{i=1}^k \lambda_i} \mathbf{x}^k$$

とおけば,  $m = k$  に対して (3.1) が成り立つと仮定していることから  $\mathbf{x}^0 \in S$  であり, 以下のよ  
うに  $m = 2$  の場合に帰着します:

$$\sum_{i=1}^{k+1} \lambda_i \mathbf{x}^i = \left( \sum_{i=1}^k \lambda_i \right) \mathbf{x}^0 + \lambda_{k+1} \mathbf{x}^{k+1} \in S.$$

■

定理 3.11. [Carathéodory の定理]

点  $\mathbf{x}$  が集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の点の凸結合であるならば,  $\mathbf{x}$  は  $S$  の  $n+1$  個以下の点の凸結合である.

証明: 点  $\mathbf{x}$  が  $\mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m \in S$  の凸結合として

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^m \lambda_i \mathbf{x}^i, \quad \lambda_1, \dots, \lambda_m \geq 0, \quad \lambda_1 + \dots + \lambda_m = 1$$

のように表されているものとし,  $m > n+1$  を仮定すると  $\mathbf{x}$  は  $S$  の  $m-1$  個以下の点の凸結合として書けることを示しましょう.  $\lambda_1, \dots, \lambda_m$  のうちに1つでもゼロがあれば,  $\mathbf{x}$  は  $m-1$  個以下の点の凸結合として書けたことになるので, ここでは  $\lambda_1, \dots, \lambda_m > 0$  とします.  $m-1$  個のベクトル  $\mathbf{x}^1 - \mathbf{x}^m, \dots, \mathbf{x}^{m-1} - \mathbf{x}^m$  は,  $m > n+1$  なので線形従属であり,

$$p_1(\mathbf{x}^1 - \mathbf{x}^m) + \dots + p_{m-1}(\mathbf{x}^{m-1} - \mathbf{x}^m) = \mathbf{0}$$

を満たす  $(p_1, \dots, p_{m-1}) \neq \mathbf{0}$  が存在します. ここで,  $p_m = -p_1 - \dots - p_{m-1}$  とおけば

$$\sum_{i=1}^m p_i = 0, \quad \sum_{i=1}^m p_i \mathbf{x}^i = \mathbf{0}$$

となります. 次に,

$$q_i = \lambda_i - \alpha p_i, \quad i = 1, \dots, m$$

とおき,  $q_1, \dots, q_m$  のうちの少なくとも1つがゼロ, 残りの  $q_i$  は非負となるように  $\alpha$  を設定します. 具体的には

$$\frac{1}{\alpha} = \max \left\{ \frac{p_i}{\lambda_i} \mid i = 1, \dots, m \right\}$$

とおくことで  $q_i \geq 0$  ( $i = 1, \dots, m$ ) とできます. 必要なら添字を付け換えればよいので  $p_m/\lambda_m = 1/\alpha$  としましょう. すると,

$$\sum_{i=1}^{m-1} q_i = \sum_{i=1}^m q_i = \sum_{i=1}^m \lambda_i - \alpha \sum_{i=1}^m p_i = \sum_{i=1}^m \lambda_i = 1$$

となり, また

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^m \lambda_i \mathbf{x}^i = \sum_{i=1}^m q_i \mathbf{x}^i + \alpha \sum_{i=1}^m p_i \mathbf{x}^i = \sum_{i=1}^{m-1} q_i \mathbf{x}^i$$

が得られ,  $\mathbf{x}$  が  $S$  の  $m-1$  個の点の凸結合であることがわかります.

もしも  $m-1 > n+1$  ならば, 以上の操作を何度か繰り返すことで  $\mathbf{x}$  を表す  $S$  の点の数を高々  $n+1$  個まで減らすことができます. ■

**凸包 (convex hull):** 集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の凸包  $\text{cov}(S)$  とは,  $S$  を含む  $\mathbb{R}^n$  の凸集合すべての積集合です.  $S$  が凸集合であれば, もちろん  $S = \text{cov}(S)$  となります.

**定理 3.12.** 集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の凸包  $\text{cov}(S)$  は  $S$  の凸結合すべての集合に等しい.

**証明:**  $S$  の凸結合すべての集合を  $T$  で表すことにします. つまり,  $\mathbf{x} \in T$  ならば, ある整数  $k \geq 1$  に対して

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^k \lambda_i \mathbf{x}^i, \quad \sum_{i=1}^k \lambda_i = 1$$

を満たす  $\mathbf{x}^1, \dots, \mathbf{x}^m \in S$  と  $\lambda_1, \dots, \lambda_m \geq 0$  が存在することになります. この  $T$  から任意に  $\mathbf{y}^1, \mathbf{y}^2$  を選べば,

$$\begin{aligned} \mathbf{y}^1 &= \sum_{i=1}^{\ell} p_i \mathbf{a}^i, \quad \sum_{i=1}^{\ell} p_i = 1, \quad \mathbf{a}^i \in S, p_i \geq 0, i = 1, \dots, \ell \\ \mathbf{y}^2 &= \sum_{i=1}^m q_i \mathbf{b}^i, \quad \sum_{i=1}^m q_i = 1, \quad \mathbf{b}^i \in S, q_i \geq 0, i = 1, \dots, m \end{aligned}$$

と表すことができます. したがって  $0 \leq \lambda \leq 1$  に対し,

$$(1-\lambda)\mathbf{y}^1 + \lambda\mathbf{y}^2 = \sum_{i=1}^{\ell} (1-\lambda)p_i \mathbf{a}^i + \sum_{i=1}^m \lambda q_i \mathbf{b}^i$$

であり,

$$(1-\lambda)p_i \geq 0, \quad \lambda q_i \geq 0, \quad \sum_{i=1}^{\ell} (1-\lambda)p_i + \sum_{i=1}^m \lambda q_i = 1$$

となります. このことは  $(1-\lambda)\mathbf{y}^1 + \lambda\mathbf{y}^2$  が  $S$  の凸結合であることを意味し,  $(1-\lambda)\mathbf{y}^1 + \lambda\mathbf{y}^2 \in T$  となって,  $T$  は凸集合であることがわかります. また, 明らかに  $S \subset T$  であり,  $T$  が凸集合であることから  $\text{cov}(S) \subset T$  です. さらに, 定理 3.10 により,  $S$  を含む凸集合  $\text{cov}(S)$  は  $S$  の点の凸結合もすべて含むはずで,  $T \subset \text{cov}(S)$ , したがって  $T = \text{cov}(S)$  です. ■

**定理 3.13.** 2つの凸集合  $S, T \subset \mathbb{R}^n$  のミンコフスキー和  $S+T$  は凸集合である.

**証明:**  $S+T$  から任意に  $\mathbf{z}^1, \mathbf{z}^2$  を選べば,  $\mathbf{z}^1 = \mathbf{x}^1 + \mathbf{y}^1$  と  $\mathbf{z}^2 = \mathbf{x}^2 + \mathbf{y}^2$  を満たす  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S$ ,  $\mathbf{y}^1, \mathbf{y}^2 \in T$  が存在します. 任意の  $0 \leq \lambda \leq 1$  に対して

$$(1-\lambda)\mathbf{z}^1 + \lambda\mathbf{z}^2 = (1-\lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 + (1-\lambda)\mathbf{y}^1 + \lambda\mathbf{y}^2$$

であるので,  $S, T$  の凸性から  $(1-\lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 \in S$ ,  $(1-\lambda)\mathbf{y}^1 + \lambda\mathbf{y}^2 \in T$  です. したがって,  $(1-\lambda)\mathbf{z}^1 + \lambda\mathbf{z}^2 \in S+T$  であり,  $S+T$  は凸集合です. ■

**定理 3.14.** 凸集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の  $\alpha (\in \mathbb{R})$  倍  $\alpha S$  は凸集合である.

**証明:**  $\alpha S$  から  $\mathbf{z}^1, \mathbf{z}^2$  を任意に選べば,  $\mathbf{z}^1 = \alpha \mathbf{x}^1$ ,  $\mathbf{z}^2 = \alpha \mathbf{x}^2$  を満たす  $\mathbf{x}^1, \mathbf{x}^2 \in S$  が存在します.

任意の  $0 \leq \lambda \leq 1$  に対して

$$(1 - \lambda)\mathbf{z}^1 + \lambda\mathbf{z}^2 = \alpha[(1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2].$$

集合  $S$  の凸性により,  $(1 - \lambda)\mathbf{x}^1 + \lambda\mathbf{x}^2 \in S$ , したがって  $(1 - \lambda)\mathbf{z}^1 + \lambda\mathbf{z}^2 \in \alpha S$  であるので  $\alpha S$  は凸集合です. ■

**系 3.15.**  $S$  と  $T$  が  $\mathbb{R}^n$  の凸集合ならば,  $S - T$  は凸集合である. ■

## 宿題

1. 以下を証明せよ:

(i)  $\mathbb{R}^n$  の開球  $B_\lambda(\mathbf{x}^0)$  はすべて開集合である.

(ii) 開球  $B_\lambda(\mathbf{a})$  の閉包  $\overline{B_\lambda(\mathbf{x}^0)}$  は

$$\overline{B_\lambda(\mathbf{x}^0)} = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \|\mathbf{x} - \mathbf{x}^0\| \leq \lambda\}$$

に等しく, 閉集合である.

( $\overline{B_\lambda(\mathbf{x}^0)}$  を  $\mathbf{x}^0$  を中心とする半径  $\lambda$  の閉球 (closed ball) とよびます.)

(iii) 閉球  $\overline{B_\lambda(\mathbf{x}^0)}$  の内部は開球  $B_\lambda(\mathbf{x}^0)$  である.

2. 任意の集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の内部が開集合であることを示せ.

3. 任意の集合  $S \subset \mathbb{R}^n$  の閉包が閉集合であることを示せ.

4. 与えられた  $m \times n$  行列  $\mathbf{A}$  と  $m$  ベクトル  $\mathbf{b}$  に関して以下を証明せよ:

(i) 集合  $\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{Ax} = \mathbf{b}\}$  は閉集合である.

(ii) 集合  $\{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{Ax} < \mathbf{b}\}$  は開集合である.

5. 任意の開球  $B_\lambda(\mathbf{x}^0)$  および閉球  $\overline{B_\lambda(\mathbf{x}^0)}$  は凸集合であることを示せ.

6. 凸集合の内部は凸集合であることを示せ.